

## 新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす心理的影響 —COVID-19感染拡大不安尺度開発に向けた予備的検討—

藤井義久\*

(令和3年2月1日受理)

FUJII Yoshihisa

Psychological Effects of the Spread of New Coronavirus Infection among University Students  
: Preliminary study for the development of the COVID-19 Infection Spread Anxiety Scale

### 1. はじめに

新型コロナウイルス感染症は、2019年12月に中国湖北省武漢市で初めて確認され、その後、世界各地に感染が拡大し、それに伴いロックダウンを初めとする様々な生活制限を含む強い感染対策を取ってきたにも関わらず、今なお感染者が加速度的に増え続けている伝染病である。世界における累計感染者数は、2021年1月10日には、ついに9,000万人を超え、過去最短の15日間で1,000万人増えており、以前鈍る気配はない。累計190万人台に上る死者数も過去最悪のペースで増え続けている(Johns Hopkins University)。WHO(2020)は、このように世界各国で猛威を振るっている「新型コロナウイルス感染症」を「SARSコロナウイルス2(SARS-CoV-2)が人に感染することによって発症する気道感染症」と定義し、COVID-19と命名した。

日本国内においては、2020年1月15日に初めて感染者が確認されて以降、徐々に感染者が増え始め、2020年4月7日には感染拡大が見られる7都道府県に対して初めて緊急事態宣言を発出、その後、他の自治体も同様に感染拡大が深刻であると判断し、2020年4月16日には緊急事態宣言の対象地域を全国に拡大した。その効果もあり、一時は感染も沈静化するかとも思われたが、緊急事態宣

言解除後、しばらくして夏には第2波が訪れ、そして2021年1月には、首都圏、関西圏を中心に医療崩壊も危惧される第3波が訪れ、全国では1日あたり7,000名を超える感染者が連日のように報告されるまでになってきた。そのうち約半数は首都圏の感染者で占められ、特に東京都においては2,000名を超える感染者数が報告される日も出てきた。そのような深刻な状況を受けて、政府は、2021年1月8日に、感染が急激に拡大している1都3県に限定して2回目の緊急事態宣言を発出した。その後、感染拡大が全国に及んでいることを受けて、さらに8つの府県を対象に新たに緊急事態宣言が発出されることになった。その効果が、1都3県に緊急事態宣言が発出されてからおおよそ2週間後の現在、少しずつ現れ始めてきている状況である。しかしながら、感染者は減ってきても、全国の重傷者や病院に入院することができず自宅待機者が依然として増え続けている危機的状況に変わりがない。このような状況を見る限り、医療現場の逼迫は極めて深刻で、当初の予定どおり緊急事態宣言を解除することができるかどうかは大変不透明であると言わざるを得ない。

このように、長期に渡って新型コロナウイルス感染拡大が続くと、経済的問題に留まらず、今後、我が国の将来を担う青少年の不安やストレスの増

\*岩手大学教育学部

大をはじめとする国民1人1人のメンタルヘルスの悪化につながる恐れが高いことも大変危惧されるところである。現に、Rajkumar (2020) や Taralesら (2020) は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う不安やロックダウン中の生活制限がメンタルヘルスに及ぼす悪影響について報告している。

さて、筆者は、休学や退学といった大学不適応傾向のある学生を早期に発見、支援していくために「大学生生活不安尺度:CLAS」(藤井, 1998; 藤井, 2013)を開発し、その尺度は、これまで多くの大学で利用され、大学不適応傾向の見られる学生の早期発見および休学・退学の未然防止に一定の成果を上げてきた(田中・菅, 2007, 鈴木, 2016)。しかしながら、この度の新型コロナウイルスの感染拡大は、従来の大学生活を一変させ、それに伴い、急速な勢いで大学不適応の傾向が見られる大学生が増えてきている現状にある。文科省(2020)の調査によると、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、2020年10月までに大学・大学院を退学あるいは休学した学生が少なくとも5,238名いることが確認されている。今後、新型コロナウイルス感染拡大が続くと、大学生活における各種制限・自粛等によって生じるメンタルヘルスの悪化や経済的困窮等の理由から、その数はさらに増えていくことが懸念されている。

そこで、本研究では、コロナ禍において大学不適応を起こすリスクの高い学生を早期に発見し、個々の学生の状況に応じた支援計画を立てることを目的としたCOVID-19感染拡大不安尺度の開発を目指して、新型コロナウイルス感染拡大に伴って大学生が現在感じている不安に関する予備的検討を行うことにした。

## 2. 方法

### (1) 調査対象

国立大学の学生(1~3年生) 計90名(男性48名, 女性42名)である。

### (2) 調査日

2020年11月18日

### (3) 調査手続

講義時間中、調査対象者に対して一斉に以下の調査内容から成る質問紙を配布し、回答を求め、回答終了後、直ちに質問紙を回収する方法で調査を実施した。なお、調査は、無記名式で実施された。

### (4) 調査内容

質問紙における調査内容は、以下の通りである。

#### ①フェイスシート

性別、学年、学部、居住形態、アルバイトの有無、奨学金の有無、家族の人数、睡眠時間、授業外の学習時間、相談できる友達の人数について尋ねた。

#### ②大学生版COVID-19感染拡大不安尺度(暫定版)

大学生を対象に実施した自由記述調査によって収集された項目のうち内容的妥当性が高いと判断された50項目を用いた。具体的には、「現在、新型コロナウイルス感染拡大に伴ってどのような不安を感じていますか。思いつくまま自由に記述してください」と教示して回答を求めた。そのような手続を経て収集された項目について、内容的妥当性の観点から本尺度の項目としてふさわしいかどうか検討した。その結果、最終的に内容的妥当性が高いと判断した50項目を本尺度の項目として採択することに決定した。なお、回答方法は、「全く不安でない」(0点)、「どちらかと言えば不安でない」(1点)、「どちらかと言えば不安である」(2点)、「とても不安である」(3点)という4件法で答える形式である。

#### ③Birlson自己記入式抑うつ評価尺度(DSRS-C)

村田(1996)が開発した日本版(18項目)を用いた。回答方法は、最近1週間の状態について「いつもそうだ」(2点)、「ときどきそうだ」(1点)、「そんなことはない」(0点)の3件法で答える形式である。

### (5) 倫理的配慮

調査実施に当たって、「大学の成績に全く関係のないこと」、「自分の回答が他人に漏れる心配はないこと」、「答えたくない質問に対しては答えなくてよいこと」など口頭および文書によって予め調査対象者に伝えることによって、倫理的配慮の徹底を図った。

## (6) 分析手続

分析に当たっては、統計パッケージであるSASを用いた。

## 3. 結果

### (1) コロナ禍において大学生が感じている不安

まず、大学生版COVID-19感染拡大不安尺度（暫定版）の各項目の回答について、「全く不安でない」ならば0点、「どちらかと言えば不安でない」ならば1点、「どちらかと言えば不安である」ならば2点、「とても不安である」ならば3点という得点を与え、各項目得点の平均値と標準偏差を求めた。その結果をTable 1に示す。各項目得点、標準偏差の横には、平均値の高い項目から順に順位もつけておいた。それによると、特に項目得点の平均値が高かった項目として、「家族がコロナに感染してしまわないか」(2.34)、「いつまで新型コロナウイルスの感染が続くのか」(2.08)、「新型コロナウイルスの流行がおさまらないこと」(2.03)であった。つまり、現在、大学生は、新型コロナウイルス感染が拡大し、なかなか収束の兆しが見えない状況そのものに対して特に強い不安を感じていることが明らかになった。

なお、項目分析の結果、項目得点の平均値が0.50という明らかに得点が低かった項目は存在しなかったため、大学生版COVID-19感染拡大不安尺度（暫定版）50項目すべてを以下の分析対象とすることに決めた。

### (2) 大学生版COVID-19 感染拡大不安尺度の開発

大学生版COVID-19 感染拡大不安尺度（暫定版）50項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、10.08, 2.07, 1.98, 1.56, 1.35, 1.21という固有値の変化および解釈可能性から6因子解が妥当であると判断された。しかしながら2つ以上の因子に高い因子負荷が見られる二重負荷の項目や因子負荷量の低い項目が見られたので、それらの項目を削除して、再度、同様の因子分析を複数回行った。その結果、最終的に、Table 2に示す因子パターン行列を得ることができた。

まず、第1因子は、「いつまで旅行ができないか」、「思うように生活が送れないこと」といった項目に高い因子負荷が見られた。これらは、今後もしばらく続くであろう自粛生活に対する不安に関する項目と考えられるので、これら6項目をまとめて「自粛生活不安因子」と命名した。

第2因子は、「人混みに行くこと」、「人混みにいること」といった項目に高い因子負荷が見られた。これらは、新型コロナウイルスに感染するかもしれないといった、感染することに対する不安に関する項目と考えられるので、これら7項目をまとめて「感染不安因子」と命名した。

第3因子は、「人と会う機会が減ってしまうこと」、「友だちと今まで通り遊べなくなること」といった項目に高い因子負荷が見られた。これらは、大学生生活全般に対する不安に関する項目と考えられるので、これら7項目をまとめて「大学生生活不安因子」と命名した。

第4因子は、「収入が減ってしまわないか」、「生活費が減ってしまわないか」といった項目に高い因子負荷が見られた。これらは、新型コロナウイルス感染拡大に伴って生じた各種経済的問題に対する不安に関する項目と考えられるので、これら4項目をまとめて「経済的不安因子」と命名した。

第5因子は、「部活の活動制限に対する不安」、「部活ができなくなってしまわないか」といった項目に高い因子負荷が見られた。これらは、部活動全般に対する不安に関する項目と考えられるので、「部活不安因子」と命名した。

第6因子は、「地元の経済が衰退しないか」、「コロナによって差別が生じないか」といった項目に高い因子負荷が見られた。これらは、新型コロナウイルス感染拡大が今後社会にどのような悪影響を与えるのか懸念する項目と考えられるので、「予期不安因子」と命名した。

なお、上記の6つの因子間相関は、Table 3に示したとおりである。それによると、「部活不安因子」とその他の因子間の相関を除いて、すべての因子間相関において、中程度以上の相関が見られた。

以上、6つの下位尺度、計33項目から成る尺度

を今後「大学生版COVID-19 感染拡大不安尺度」と呼ぶことにする。なお、不安得点（全体）は、各下位尺度を構成している項目の得点を単純に合算する形で算出することにした。従って、不安得点（全体）の範囲（レンジ）は、0点から99点ということになる。

### (3) 尺度の信頼性の検討

大学生版COVID-19感染拡大不安尺度の下位尺度ごとに、クロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、クロンバックの $\alpha$ 係数は、「自粛生活不安」が.83,「感染不安」が.82,「大学生生活不安」が.81,「経済的不安」が.85,「部活不安」が.89,「予期不安」が.84,全体でも.78という値を示した。このことから、本尺度には一定の信頼性が備わっていることが明らかになった。

### (4) コロナ禍における不安状況

大学生版COVID-19 感染拡大不安尺度の下位尺度ごとに、不安得点の平均値、標準偏差、最小値、最大値を算出した。あわせて、5段階評価基準に従って、「1」（全体の約7%）,「2」（全体の約24%）,「3」（全体の約38%）,「4」（全体の約24%）,「5」（全体の約7%）という相対的評価を行っていく際の客観的基準について明記した。その結果をTable 4 に示す。なお、各下位尺度ごとの平均値は、各下位尺度を構成している項目数が異なっているため、単純に比較することはできない。そこで、各下位尺度得点の平均値を単純に各下位尺度を構成している項目数で割ることによって算出された「1項目あたりの項目得点平均値」をもとに、下位尺度間の得点比較を行うことにした。その結果、1項目あたりの項目得点平均値は、「自粛生活不安」が1.64,「感染不安」が1.62,「大学生生活不安」が1.53,「経済的不安」が1.68,「部活不安」が0.84,「予期不安」が1.56,「不安得点（全体）」が1.54であった。このことから、コロナ禍における大学生は、「経済的不安」を特に強く感じており、次に「自粛生活不安」,「感染不安」を強く感じていることが明らかになった。

### (5) コロナ禍における不安状況の性差の検討

コロナ禍における大学生の不安状況の性差につ

いて検討するために、大学生版COVID-19 感染拡大不安尺度の下位尺度ごとにt検定を行った。その結果をTable 5に示す。それによると、すべての下位尺度および全体得点において有意な性差は確認されなかった。このことから、コロナ禍における大学生の不安水準に男女差が見られないことが明らかになった。

### (6) コロナ禍における不安とうつとの関連

本研究において実施したDSRS-Cの合計得点が16点以上の者はうつ傾向が強いと判断される。そのカットオフポイントに従って、コロナ禍においてうつ傾向が強く何らかの医学的支援が必要と判断される大学生の割合は、男性が19.15%,女性が36.59%,全体が27.27%であった。

そこで、次にそのDSRS-Cによって算出された「うつ得点」を目的変数、大学生版COVID-19 感染拡大不安尺度の各下位尺度得点を説明変数として、全体および男女別に重回帰分析を行った。その結果をTable 6 に示す。まず、男性において、標準偏回帰係数の値から、うつ得点と最も関連が強かったのは「経済的不安」( $\beta = .55, p < .05$ )であった。すなわち、経済的不安が強い学生ほどうつになりやすい傾向が明らかになった。一方、女性においては、標準偏回帰係数の値から、うつ得点と最も関連が強かったのは「自粛生活不安」( $\beta = .74, p < .01$ )であった。すなわち、自粛生活不安が強い学生ほどうつになりやすい傾向が明らかになった。このように、男性と女性によってコロナ禍においてうつになりやすい不安の種類が異なることがわかった。さらに、全体においては、標準偏回帰係数の値から、うつ得点と最も関連が強かったのは「自粛生活不安」( $\beta = .50, p < .01$ )、次に「学校生活不安」( $\beta = .39, p < .05$ )であった。すなわち、自粛生活や学校生活といった新型コロナウイルス感染拡大によって今までの日常が奪われた生活において不安を感じている学生ほどよりうつになりやすい傾向が明らかになった。

Table 1 新型コロナウイルス感染拡大に伴って生じた不安に関する項目得点の平均値および標準偏差

項目内容	M(SD)	項目内容	M(SD)
1. 外出してもいいのか	1.49(1.03)	26. 体調を崩してしまわないか	1.51(1.17)
2. 地元の経済が衰退しないか	1.27(1.09)	27. 生活費が減ってしまわないか	1.57(1.11)
3. 思うようにならないこと	1.72(0.97)	28. 人間関係が希薄になってしまわないか	1.32(1.04)
4. 予防や他人への配慮のない人	1.86(0.93)	29. 今後の競技生活・部活動	1.34(1.21)
5. コロナ禍に災害が起きないか	1.62(1.01)	30. 定職に就くことができるか	1.90(1.08)⑧
6. 消毒をせねばならないこと	0.67(0.82)	31. 留学できないこと	0.67(1.01)
7. 自由に好きな場所に行けないこと	1.88(1.14)⑩	32. 再びオンライン授業にならないか	1.51(1.06)
8. いつまで旅行ができないのか	1.79(1.19)	33. 部活の大会がいつから再開されるかわからないこと	0.62(0.99)
9. 思うように生活が送れないこと	1.60(1.06)	34. 友達とのコミュニケーションが取れなくなること	0.96(0.91)
10. 公共交通機関を利用すること	1.49(0.93)	35. 就職雇用が減ってしまうかもしれないこと	1.74(1.11)
11. 以前の日常がいつ戻るか	1.92(1.12)⑥	36. 大学生活の先が見通せないこと	1.64(1.07)
12. いつから海外に行けるようになるか	1.23(1.21)	37. 部活の活動制限に対する不安	1.07(1.23)
13. 政府の対応が遅いこと	1.11(0.98)	38v人と会う機会が減ってしまう	1.48(1.04)
14. 新型コロナウイルスの流行がおさまらないこと	2.03(1.06)③	39. 授業で感染が拡がること	1.53(0.97)
15. 人混みにいること	1.86(0.97)	40. バイト先でコロナに感染してしまわないか	1.54(1.16)
16. コロナウイルスによって差別が起きないか	2.00(0.96)④	41. 家族がコロナに感染してしまわないか	2.34(0.82)①
17. 感染した情報が拡散しないか	1.54(0.94)	42. 部活ができなくなってしまうか	1.22(1.20)
18. また自粛生活にならないか	1.97(1.03)⑤	43vコロナが影響して成績が落ちないか	1.37(1.12)
19. 人混みに行くこと	1.90(0.92)⑧	44. 収入が減ってしまわないか	1.50(1.10)
20. 安心できる時間がないこと	0.98(0.90)	45. 大学生活を満喫できないこと	1.84(1.19)
21. 人間としての楽しみを行うことができないこと	1.46(1.05)	46. 物価が高くなるか	1.18(1.06)
22. いつまで新型コロナウイルスの流行が続くのか	2.08(1.02)②	47. 今までできていた企画・行事ができないこと	1.74(1.12)
23. 人前で咳やくしゃみをする	1.87(0.95)	48. 遠くの友達と会えないこと	1.92(1.13)⑥
24. 生活制限で運動不足になっていないか	1.27(1.08)	49. バイトが見つからないこと	0.58(0.81)
25. 在宅時間の増加に伴ってストレスが増加しないか	1.44(1.09)	50. 友達と今まで通りに遊べないこと	1.71(1.15)

(注) SDの右横の数値は、不安の大きさを示す順位である。

Table 2 大学生版COVID-19感染拡大不安尺度の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

項目	I	II	III	IV	V	VI	h <sup>2</sup>
<b>(I. 自粛生活不安)</b>							
8. いつまで旅行ができないか	.76	.00	.12	.03	.04	.03	.72
9. 思うように生活が送れないこと	.72	.13	.05	-.02	-.07	.04	.67
7. 自由に好きな場所に行けないこと	.71	.05	-.07	.11	.02	-.03	.54
21. 人間としての楽しみができないこと	.65	.02	.04	.23	.01	-.04	.80
12. いつから海外に行けるようになるか	.59	-.09	.17	-.04	.06	.01	.43
11. 以前の日常がいつ戻るか	.57	.08	.21	-.08	-.03	.20	.63
<b>(II. 感染不安)</b>							
19. 人混みに行くこと	-.02	.90	.06	-.05	-.00	-.02	.80
15. 人混みにいること	-.05	.68	.17	-.12	.01	.26	.70
10. 公共交通機関を利用すること	.21	.65	-.05	-.15	.12	-.07	.50
39. 授業で感染が拡がること	-.07	.52	.06	.21	.16	.01	.44
26. 体調を崩してしまわないか	-.11	.52	.35	.26	-.13	-.15	.60
1. 外出してもよいのか	.13	.49	-.10	.05	-.05	.31	.52
40. 家族がコロナに感染してしまわないか	.25	.48	-.07	.13	-.07	.08	.48
<b>(III. 大学生生活不安)</b>							
38. 人と会う機会が減ってしまうこと	.17	.08	.71	.05	.17	-.08	.78
50. 友達と今まで通り遊べなくなること	.37	-.01	.64	-.14	-.07	-.08	.63
32. 再びオンライン授業にならないか	.01	-.18	.62	.10	-.03	.26	.49
36. 大学生生活の先が見通せないこと	.06	-.01	.57	.39	-.09	-.02	.65
34. 友達とのコミュニケーションが取れなくなる こと	-.04	.31	.53	.11	.01	-.27	.49
28. 人間関係が希薄になってしまわないか	.08	.19	.50	-.00	-.02	.10	.47
48. 遠くの友達と会えないこと	.13	.04	.48	.09	-.06	.20	.53
<b>(IV. 経済的不安)</b>							
44. 収入が減ってしまわないか	.04	.16	-.20	.72	-.01	.13	.63
27. 生活費が減ってしまわないか	.01	.07	.04	.71	-.06	.03	.59
35. 就職雇用が減ってしまうかもしれないこと	.04	-.07	.17	.70	.11	.04	.62
30. 定職に就くことができるか	.10	-.16	.16	.68	.03	-.03	.52
<b>(V. 部活不安)</b>							
37. 部活の活動制限に対する不安	-.07	-.03	.01	.13	.88	.00	.82
42. 部活ができなくなってしまうか	.00	.08	-.09	.11	.82	-.03	.74
29. 今後の競技生活・部活動	.12	.00	.06	-.13	.79	.01	.62
33. 部活の大会がいつから再開されるかわから ないこと	-.07	.02	.06	-.14	.65	.08	.42
<b>(VI. 予期不安)</b>							
2. 地元の経済が衰退しないか	.07	.02	.11	-.10	.07	.57	.40
16. コロナによって差別が起きないか	.14	-.05	-.07	.09	.04	.56	.41
17. 感染した情報が拡散しないか	-.02	.04	-.17	.37	-.02	.53	.59
43. コロナが影響して成績が落ちないか	-.35	.26	.27	.23	.29	.47	.50
5. コロナ禍に災害が起きないか	.11	.13	.17	-.11	-.06	.45	.36

Table 3 大学生版 COVID-19感染拡大不安尺度の因子間相関

下位尺度	自粛生活不安	感染不安	大学生生活不安	経済的不安	部活不安	予期不安
自粛生活不安	1.00					
感染不安	.56***	1.00				
大学生生活不安	.65***	.60***	1.00			
経済的不安	.41***	.48***	.49***	1.00		
部活不安	.10	.11	.16	.13	1.00	
予期不安	.38***	.48***	.51***	.34***	.67***	1.00

\*\*\*  $p < .001$

Table 4 大学生版Covid-19 感染拡大不安尺度の下位尺度ごとの平均値 (M), 標準偏差 (SD), 最小値 (MIN), 最大値 (MAX) および 5 段階評価基準

下位尺度	M(SD)	MIN	MAX	5 段階評価基準				
				レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4	レベル 5
自粛生活不安	9.86 (5.41)	0	18	0	1 ~ 7	8 ~ 13	14 ~ 16	17 ~ 18
感染不安	11.40 (5.36)	0	21	0 ~ 1	2 ~ 8	9 ~ 13	14 ~ 18	19 ~ 21
大学生生活不安	10.74 (5.50)	0	21	0 ~ 1	2 ~ 5	6 ~ 13	14 ~ 18	19 ~ 21
経済的不安	6.73 (3.61)	0	12	0	1 ~ 4	5 ~ 8	9 ~ 11	12
部活不安	3.35 (3.92)	0	12	0	1	2 ~ 5	6 ~ 11	12
予期不安	7.82 (3.49)	0	15	0 ~ 1	2 ~ 5	6 ~ 9	10 ~ 13	14 ~ 15
不安得点 (全体)	50.90 (19.16)	8	86	0 ~ 11	12 ~ 45	46 ~ 57	58 ~ 75	78 ~ 86

Table 5 大学生版COVID-19感染拡大不安尺度の下位尺度ごとの男女別平均値, 標準偏差および性差

下位尺度	M(SD)		性差
	男性	女性	
自粛生活不安	9.38 (5.26)	10.41 (5.59)	<i>n.s.</i>
感染不安	10.91 (5.37)	11.95 (5.36)	<i>n.s.</i>
大学生生活不安	10.40 (5.56)	11.12 (5.47)	<i>n.s.</i>
経済的不安	6.77 (3.85)	6.68 (3.36)	<i>n.s.</i>
部活不安	3.98 (3.80)	4.78 (4.07)	<i>n.s.</i>
予期不安	7.23 (3.62)	8.49 (3.25)	<i>n.s.</i>
不安得点 (全体)	48.68 (19.25)	53.50 (18.97)	<i>n.s.</i>

Table 6 コロナ禍における不安とうつとの関連性（重回帰分析結果）

下位尺度	うつ（男性）	うつ（女性）	うつ（全体）
自粛生活不安	.37	.74**	.50**
感染不安	.12	.40	.23
大学生生活不安	.36	.40	.39*
経済的不安	.55*	.08	.27
部活不安	.19	.24	.14
予期不安	.44	.10	.23
R <sup>2</sup>	.28	.26	.20

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ 

#### 4. 考察

本研究の目的は、新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす心理的影響について分析するために、大学生版COVID-19感染拡大不安尺度の開発に向けて、コロナ禍における大学生の不安の実態について明らかにすることであった。

まず、大学生がコロナ禍において感じている不安について自由記述調査によって尋ね、その回答をもとにして、50項目から成る「大学生版COVID-19感染拡大不安尺度」（暫定版）を作成した。そして、その尺度項目について主因子法・プロマックス回転を行った結果、COVID-19感染拡大不安は、自粛生活不安、感染不安、大学生生活不安、経済的不安、部活不安、予期不安という6つの因子から構成されていることがわかった。このことから、コロナ禍における大学生の不安は、自粛生活のこと、感染状況のこと、大学生生活全般のこと、経済的問題、部活のこと、将来のことと大きく6つに分かれることがわかった。従って、今後、これら6つの視点に立って、コロナ禍における個々の大学生の不安状況に応じた適切な心理的支援を行っていくことが必要であることが浮き彫りになった。

なお、本尺度の下位尺度および全体におけるクロンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、すべて.70以上の値を得たことから、本尺度には一定の信頼性のあることが確認された。ただ今後、結果の安定性について吟味する意味からも、再検査信頼性

についても調べてみる必要があると思われる。

次に、大学生版COVID-19感染拡大不安尺度の各下位尺度ごとの1項目あたりの項目得点の平均値を算出したところ、「経済的不安」が6つの下位尺度の中で最も平均値の高い結果となった。このことから、現在、コロナ禍において、大学生は、とりわけ経済的不安を強く感じていることがわかった。従って、大学においては、感染防止対策も重要であるけれども、それ以上に経済的不安を払拭するためにも、手厚い経済的支援を行うことが必要であることが明らかになった。それでは、具体的にどういった経済的支援を行うことが大学生の経済的不安を下げることにつながるのかについては、ただ単に奨学金制度を拡充するだけで十分かどうか、今後さらに様々な角度から詳細な検討をしていく必要があると考える。

最後に、コロナ禍における大学生の不安とうつとの関連性について、重回帰分析によって検討した。その結果、標準偏回帰係数の値から、男性においては「経済的不安」がうつと特に強い関連が見られ、女性においては、「自粛生活不安」がうつと特に強い関連が見られた。すなわち、うつの防止のためには、男性においては「経済的不安」を下げることであり、女性においては「自粛生活不安」を下げることでありといったように、男女によってコロナ禍における大学生のうつや自殺防止を図っていくための手立ては異なることがわかった。従って、今後は、男女別々に、それぞ

れ大学生のうつと強く関連していると考えられる不安感を減らしていくためには、どういった具体的な支援を行っていけばよいのか、効果検証も含めて、もう少し詳細な検討をしていく必要があると言える。

## 5. まとめ

文科省(2019)の高等学校保健体育科学学習指導要領解説「現代の感染症とその予防」には、「感染症のリスクを軽減し予防するためには、衛生的な環境の整備や検疫、正しい情報の発信、予防接種の普及など社会的な対策とともに、それらを前提した個人の取組が必要であることを理解できるようにする」と明記されている。現在、児童生徒間においても高まっている新型コロナウイルス感染拡大に伴う様々な不安感を払拭するためにも、高等学校だけではなく、小学校、中学校においても学校安全教育の一環として、新型コロナウイルス感染症に対する正しい知識を身につけるとともに、正しく恐れ予防する力を育てる新型コロナウイルス感染防止教育を今後積極的に行っていくことが必要であると考えられる。そうした感染防止教育を通して、新型コロナウイルス感染症に対する不安が低減し逆に新型コロナウイルス感染防止への意識が高まることにより、児童生徒のメンタルヘルスの維持、増進が期待できるであろう。それは、すなわち、新型コロナウイルスの感染拡大によって今後ますます増えることが予想されている「いじめ」や「不登校」の未然防止にも大いに貢献するものと考えられる。

本研究においては、新たな尺度開発のためにコロナ禍における大学生の不安に関する予備的検討を主たる目的としたため、調査対象や調査人数を限定して行った。しかし、今後、本尺度を広くコロナ禍において日々生活している児童、生徒、学生に対して実施していくためには、調査対象を小学生、中学生まで広げて、しかもより多くの調査対象者に対して大規模調査を繰り返すことにより、尺度の標準化を図っていくことが急務である。そのような手続きを経て、新型コロナウイ

ルス感染拡大に伴って生じる各種不安感を多面的に測定・評価できる信頼性、妥当性の高い尺度を開発し、新型コロナウイルス感染拡大が児童生徒の心に及ぼす影響が発達段階によってどのように異なるか明らかにしたいと考えている。そして、発達段階に応じて異なる各種不安感を減らすとともに、感染防止に対する意識を高めていくためには、学校安全教育の1つとしてどういった感染防止教育プログラムを用意すればよいか、その効果研究も含めて検討していくことが必要であると考えられる。

## 謝辞

本研究及び調査に対し、ご理解ご協力くださった関係の皆様へ深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 藤井義久(1998)『大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討』*心理学研究*, 68(6), 441-448.
- 藤井義久(2013)『CLAS大学生生活不安尺度』(マニュアル, 複写式検査用紙, 自己採点用カルテ, マーク式用紙), 金子書房
- 村田豊久(1996)『学校における子どものうつ病—Birllesonの小児期うつ病スケールからの検討』*最新精神医学*, 1, 131-138.
- 文部科学省(2020)『高等学校学習指導要領解説(保健体育・体育編)』東山書房, 201.
- Rajkumar,R.P.(2020) COVID-19 and mental health: A review of the exiting literature. *Asian journal of psychiatry*,52:e102066.
- 鈴木慶子(2016)『大学生生活における不安に関する意識調査—スポーツ系コースに所属する学生を対象に』*駿河台大学論叢*, 53, 153-159.
- 田中存・菅千索(2007)『大学生生活不安に関する心理学からのアプローチ』*和歌山大学教育学部紀要 教育科学*, 57, 15-22.
- Torales,J.,O'Higgins,M.,Castaldell-Maia,J.M. and Ventriglio,A.(2020) The outbreak of COVID-19 coronavirus and its impact on

grovel mental health. *International Journal of Social Psychiatry*,66(4),317-320.

WHO(2020) Clinical care for severe acute respiratory infection:toolkit:COVID-19 adaptation.